

近世から近代 宗教捉え直す

幕末維新の歴史はこれまで、もっぱら政治の転換点として描かれてきた。だが、キリスト教を禁じるための寺請制度による民衆統制が廃仏毀釈運動につながっていくように、変革の底流で政治と絡み合う宗教の問題は無視できない。

仏教、神道からキリスト教、民衆宗教まで、この時期の多様な宗教世界

「カミとホトケの幕末維新」刊行

転換期の思想浮き彫り

カミと
ホトケの
幕末維新



の内実や言説の推移についての論考・コラム集「カミとホトケの幕末維新」交錯する宗教世界」（写真・法蔵館）が出版された。龍谷大の岩田真美准教授、金城学院大の桐原健真教授を編者に、計21人が執筆。幕末維新时期を単に断絶として捉えず、近世から近代

へ橋渡しされる文化的動向を見つめている。

国学などからの廃仏論が高まった幕末、仏教擁護（護法）論を展開したのが周防の真宗僧、月性である。護法、護国、防邪（キリスト教を防ぐ）を一体化させた主張は儒学の知識人との交流を通じて形成され、教団改革につながっていく。近代仏教の形成を妨げるものとされてきたその護法論を「近世と近代をつなぐ思想」として捉え直すことも可能」と岩田准教授は指摘する。

この時期のキリスト教を巡る言説には、近世以来の邪教観が反映されがち

なことについて、国学院大の星野靖二准教授は注意を促す。例えば明治4（1871）年に広島で起きた武一騒動では、「新政府が村役人に耶蘇宗の秘仏を渡している」という流言があった。ここでの「耶蘇」は実際の宗教と無関係の表象としてのキリスト教で、新政府の早急な開化推進姿勢への批判として用いられたとみる。

幕末維新时期に交錯する「カミ」と「ホトケ」についての論考には、政治史的な叙述を一度むいたような深みがあり、転換期の思想、文化の多様性も浮き彫りにしている。2160円。

（山城滋）